

☆8月10～11日の二日間「旧大津小学校史資料目録作成」と

「『学校日誌』の記録保存用のデジタルデータ化」を実施！

8月10～11日の二日間、「高知県の学校資料を考える会」「高知城歴史博物館」「土佐清水市郷土史同好会」などの会員や職員の有志により、旧大津小学校の「学校史資料の目録作成」と「学校日誌デジタルデータ化」を平行して実施しました。今回は、第1回6月12～13日と第2回7月18日に続き、3回目の学校史資料保存の活動になります。

今回は、作業を2グループに分け、目良代表・楠瀬事務局長を中心に中浜小学校で「目録作成」を、渡部館長・片岡学芸員を中心に中央公民館で「学校日誌デジタルデータ化」を実施しました。なお、この作業には地元の土佐清水市郷土史同好会やあしずり遍路道保存会の会員も参加しました。この夏有数の暑さではありましたが、概ね全資料の約3分の2の進捗状況です。

資料整理が一段落すれば、「高知県の学校資料を考える会」「高知城歴史博物館」と協力し、市民に向けて企画展や講座なども開き、普及啓発や資料活用をしていきたいと考えております。楽しみにお待ちしております。今回市外からの参加者は、松尾のペンション「釣りの里」を借り切って宿舎としました。ここで作業に汗を流し、ご協力いただいた方々の所属と氏名を紹介させていただきます(敬称を省く)。



【学校日誌デジタルデータ化グループ】***

高知県立高知城歴史博物館館長・渡部 淳
高知県立高知城歴史博物館企画員・筒井聡史
NPO 地域文化計画理事・影山千夏
土佐清水市郷土史同好会役員・山田隆子

高知県立高知城博物館学芸員・片岡 剛
土佐地域史研究会・宇賀日香里
徳島文理大学大学院修士課程2年・山崎 徹
高知大学2年・田邊佳久、渡邊雄裕

【目録作成グループ】***

高知県の学校資料を考える会代表・目良裕昭 (いの町立枝川小学校主幹)
高知県の学校資料を考える会事務局長・楠瀬慶太 (高知新聞学芸部記者)
高知県立高知城博物館学芸員・高木翔太
高知大学人文学部教授・小幡 尚
土佐清水市郷土史同好会会員・弘田之彦 (あしずり遍路道保存会会長)
あしずり遍路道保存会会員・鈴木 誠

奥四万十山の暮らし調査団・武内文治
土佐清水市郷土史同好会会長・武藤 清
土佐清水市立中央公民館長・岩井拓史

◎市内足摺岬・松尾両地区に残る防空壕について

「高知新聞一面」に掲載される！

8月8日(土)の高知新聞朝刊一面に土佐清水市松尾と足摺岬両地区に残る太平洋戦争中に掘られた防空壕が取り上げられていました。松尾は集落外れの遍路道沿いにある防空壕について福田博さん(84歳)の話、足摺岬は上前集落白皇山道入口付近にある防空壕について岡野栄さん(87歳)の話が掲載されました。

この取材の前に高知新聞報道部海路記者が市内戦争遺跡について相談のため市史編さん室に来室し、その際に松尾・足摺岬・中浜に現存する防空壕を紹介しました。

昨年、市史編さん事業の戦争遺跡調査を行い、そのとき

出原恵三市史編集委員と伯母(岡野栄)の話を中心に聞き取りしており、これが今回の取材の基になりました。伯母は母より9歳年上、戦争中は丁度12、3歳ころで多感な時期であり、その記憶もまだ鮮明に残っています。壕は家の庭にも掘られ、地下壕のような構造となっていました。下に木板を敷き詰め、編み込んだ竹で側面の壁を覆い、土などで衣服が汚れないよう工夫していました。

そこに畳半分ほどの出入りのためのフタを付けました。伯母たちは、怖々とそのフタを数センチ上げ、その隙間から外の様子を見ていました。真っ赤に燃えた機関銃の弾がパラパラと掃射される光景がそこにありました。伯母や母たちが見ていたその光



景こそがまさに戦争の実相であったと思います。

首都圏から遠く離れた土佐清水市域ではあるが、かつて確実に空襲が実行されてきました。私たち戦争を知らない世代は、このような戦争体験をしっかりと聞き取ることが必要です。そして、これを集積して後世に残し、受け継いでいくことが重要はないでしょうか。現行『土佐清水市史上巻』の近現代史を執筆された故・中村春利先生は、ご存命ならば丁度、伯母と同じ 87 歳です。生涯、市域の戦争遺跡の探求に力を入れられていたのが中村春利先生です。

新市史においては、「戦争遺跡の章」全般を出原恵三委員にその執筆していただきます。中村春利先生の遺志を継ぎ、市史編さん室としても委員と力を合わせて「読みごたえのある、後世に伝授していくべき章」を力強く書き上げていきたいと決意しています。そこに、戦争の真実の実相を明らかにしていく要諦があると思うからです。

「市史執筆のブレイクタイム(8)」 近世初めの土佐清水市域の様相

中世後期末の土佐清水市域一帯は、大きくは以南村（いなんむら）と呼ばれていた。「以南」は「伊南」と書かれることもあった。一つの行政圏として確立されたのは近世のことである。もとは四万十川南岸から三原を経て福良（宿毛市）に至るラインから南側一帯を指していたが、天正 17・18 年（1589・1590）の『長宗我部地検帳』にて「以南村々」として区画され、三原が「三原郷」として独立し、大月町の西半分が「奥内郷」として分離している。近世における「以南」とは、四万十川左岸河口部の小名鹿・立石・布から海岸線を南下し、現大月町月灘地区に至る一帯を指した。その中心地の郷方は、以南村惣社が置かれた三崎村であり、浦方は清水浦であった。そこに地域の村々を束ねるそれぞれ郷浦の大庄屋が置かれたのである①。

中世末、以南村は、土佐一条氏から長宗我部氏へと支配体制が変化した。しかし、以南一帯の勢力関係には大きな変化が見られなかった。旧土佐一条氏に従っていた豪族である加久見・立石・大岐各氏は、その頭が土佐一条氏から長宗我部氏に変わっただけで、彼らの領地はほぼ安堵された。以南村は、これらの豪族と金剛福寺荘園で占められていた②。

この中で、土佐一条氏支配下で 3000 石、長宗我部支配下で 2000 石を有していた金剛福寺荘園は、山内氏入国支配により、僅か 100 石に削減された。その荘園は、足摺村と津呂村の四町三反のみが認められたに過ぎなかった。こうしたなか、かつての有力豪族である加久見氏と大岐氏は、文禄の役（1592・93）で没し、その一族は衰退し、領地も没収された。それ以外の中野・蔵松・岩藤・岡林各豪族の詳しい動向は不明である③。

時代転換期の渦中、下田浦（四万十市）の豪族江口氏が関ヶ原の戦い（1600）で戦死したと伝えられる。以南村においても、このように戦死した豪族が多くいたと思われる。一方で山内氏の土佐入国に協力し、浦戸一揆鎮圧に尽力した立石助兵衛正賀は、その後に肥後熊本藩（細川氏）に優遇され仕官した④。このような旧勢力の一掃と懐柔を重ねながら山内氏は徐々に土佐藩の治世の確立を図っていったと思われる。

特に、本藩・中村支藩・金剛福寺荘園と領地や税収が複雑に絡み合い入り組んだ以南村一帯は、複雑な治世状況であった。松尾村・口猿野（現在の下益野～浜益野一帯）・貝掛村は、米収穫の税収は中村支藩、漁獲の税収は本藩と決められた。久百々村は、山から河口までの収穫物産の税収が中村支藩、漁獲が本藩と決められ、清水浦は、米収穫・漁獲とも中村支藩であるが、積荷・事業税は本藩に税を納めなければならなかった。特に複雑であったのは、伊佐村（現在の足摺岬地区）である。耕作地は金剛福寺荘園、居住区は中村支藩領、浦と伊佐湊及び漁獲は本藩と三重構造で支配されていた⑤。

註

①中山進「四．近世」(『土佐清水市史上巻』土佐清水市、1980年、407頁)

②①に同じ。408頁。

③①に同じ。409頁。

④③に同じ。

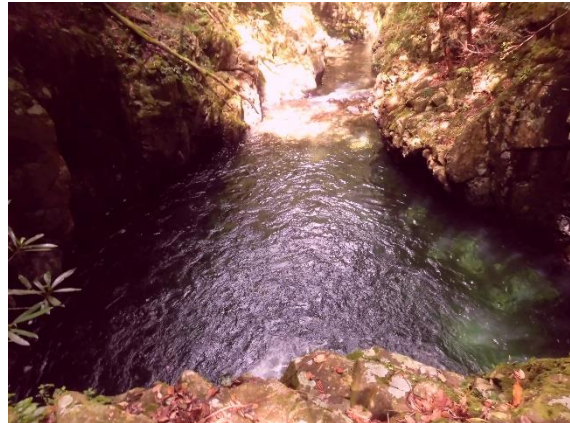
関ヶ原の戦いに西軍の将の一人として参戦した長宗我盛親に従った立石助兵衛正賀は、主君盛親の使者として戦場に残り、井伊直政を介して徳川家康に恭順と謝罪の意を伝える。盛親は大坂に上り、井伊直政を通じて家康に謝罪し、その後、土佐国の領地を没収され、京都に蟄居謹慎を命じられている(『土佐国蠹簡集』)。その後、正賀は、井伊直政の軍勢が国明け渡しのため、浦戸城に入るときに道先案内を行い、抵抗した旧家臣団を欺き、井伊軍を浦戸城に入れた。その結果、井伊軍は、浦戸一帯を制圧し、旧家臣団や庄屋ら73人を種崎で処刑した。この功により、立石助兵衛正賀(当時74歳)は、肥後細川家に1000石で召し抱えられ、長男市正宗倫と次男内蔵助も各々600石を給された。

⑤①に同じ。411頁。

伝説の舞台「お藤が轟」 近世「お藤伝説」は、今もなお生きている…



↑ 淵に流れ落ちる滝の流水



↑ 淵は深い緑色に染まり、今でも大蛇が潜んでいるかのように感じられる。



↑ 轟の右岸傾斜地に建てられている藤神社



↑ ダム建設を行った南海水力電気の石碑

「お藤が轟」景観写真をご覧いただき、一幅の清涼感をお感じください。暑さが続きますが、熱中症に留意され、この夏をのりきりましょう！執筆の夏です。ファイト！